

## 学位請求論文審査報告書

氏名 磯部美紀

論文題目「現代日本の葬送儀礼に関する宗教社会学的研究——僧侶介在の意味に注目して」

審査委員 主査 大谷大学准教授 徳田 剛  
博士（学術） [神戸大学]  
副査 大谷大学教授 高井 康弘  
大谷大学教授 野村 明宏  
佛教大学教授 大谷 栄一  
博士（社会学） [東洋大学]

### I 論文内容の要旨

本論文の目的は、葬送儀礼における重要なアクターである僧侶による実践に着目し、現代日本の葬送儀礼に僧侶が介在することの意味を明らかにしようとするものである。かつては家族・親族や地域の人たちが総出で葬儀を運営し参加していたが、近年ではごく近しい親族や知人・友人のみが参列するような小規模な葬儀が増えている。また、「終活」という言葉にあるように、自身の「死」の迎え方や葬儀の様式を自らの希望に沿った形で執り行おうとする動きも見られ、旧来の僧侶立ち合いのもとで行われる仏式葬儀の形を取らないケースも出てきている。そうした時代状況の中で、実際の葬送儀礼はどのように行われているのか、その中で僧侶・葬祭業者・遺族などの各アクターがどのような意識や心情のもとに葬送儀礼に参加し執り行っているのか、という問いへの答えを、宗教社会学の理論と（調査データに基づく）経験的な知見に基づいて明らかにしようとするのが、本論文の目指すところである。

論文の構成は以下のとおりである。

#### 序章 現代日本の葬送儀礼と僧侶

1. 問題の所在 一個々人によって見いだされる葬送儀礼の意味
2. 宗教社会学という視点と方法
3. 本稿の射程
4. 本稿の構成

## 第1章 葬送儀礼と僧侶に関する先行研究

1. 日本における葬送儀礼の変遷—誰がどのように叩いてきたのか
2. 現代日本における葬送儀礼の諸特徴
3. 僧侶が介在する葬送儀礼の概要
4. 葬送儀礼の果たす役割—宗教社会学的視点から
5. 小括

## 第2章 地方寺院の僧侶による葬儀実践の模索—新潟県旧新津市 K 寺の法話実践を事例に

1. はじめに
2. 葬送儀礼における法話
3. 研究の対象と方法
4. K 寺における葬儀実践
5. 法話における「故人らしさ」
6. 小括

## 第3章 葬送儀礼の現状と僧侶の役割—岐阜県西濃地域の事例を中心に

1. はじめに
2. 調査の概要
3. 西濃地域周辺の葬送儀礼—僧侶の役割をめぐって
4. 葬送儀礼に僧侶が介在する意味
5. 小括

## 第4章 現代日本の葬送儀礼と僧侶

1. 各事例の要点
2. 葬送儀礼で僧侶が果たしうる3つの役割
3. 僧侶介在を困難にする要因とそれに対する対処法・工夫
4. 小括

## 終章 僧侶を介した葬送儀礼の現状とこれから

1. 各章で得られた知見
2. 現代日本における僧侶を介した葬送儀礼の意味
3. 現代日本で遺族が僧侶にアクセスする方法
4. 残された課題と今後の展開

序章では、現代における葬送儀礼の特徴とそこでの僧侶を取り巻く状況を概観したうえで、本論文の考察目的と分析方法が明らかにされた。1990年代以降、僧侶の介在しない「新たな」葬送儀礼が増加してきており、そうした変化の背後には、葬送儀礼を営む「意味」が個人によって見いだされるべきとする見方が有力となってきていること、言い換えれば人によって死や葬儀に関する考え方の違いが鮮明化してきていることがある。このような、宗教儀礼とその背後に存する人々の意識を、同時代的な社会状況を踏まえつつとらえよう

とするのが宗教社会学の視点である。本章では、葬送儀礼の一般的な定義とともに、本論文の研究対象である真宗大谷派の葬送儀礼の特徴が明らかにされるとともに、本論文で宗教社会学という視点や方法を採用することの意義について述べられている。

第1章では、葬送儀礼と僧侶に関する先行研究の検討が行われた。かつての葬送儀礼は地縁や血縁による相互扶助によって葬送儀礼が運営されていたが、次第に遺族が葬祭業者の提供するサービスを選び取る（購入・消費する）ものとなっていった。それとともに、葬儀の縮小・小規模化、簡素化、個性化などの変化もみられるようになった。そうした葬儀をめぐる変化とともに、戦後に二度にわたって仏式葬儀不要論が興隆し、葬儀への僧侶の立ち合いを必ずしも当たり前とみなさないような、新たな僧侶の役割観もみられるようになった。こうした葬儀や僧侶をめぐる諸状況を概観するとともに、死や葬送に関する先行研究を儀礼論、記憶論、秩序形成論の3つの流れに整理しつつ、その要点を提示した。

第2章と第3章では、葬儀実践に関する経験的な調査研究の成果がまとめられている。第2章では、僧侶が葬送儀礼の実践において自らにどのような役割を課しつつその場に臨んでいるのかについて、法話に着目しつつ新潟県旧新津市での事例が検討されている。葬送儀礼が実際にどのような形で進行しているのかについて、通夜の参与観察を通じて明らかにしたほか、葬送儀礼に臨む僧侶の思いやその場での遺族の受け止めなどについて、後日行った聞き取り調査から明らかにした。それを通じて、仏式葬儀としての基本的な枠組み（「型」）を維持しながらも、法話の中などに「故人らしさ」を反映させながら、悲しみにくられる遺族がスムーズに儀礼を遂行できるような配慮がなされていることが観察された。

第3章では、岐阜県西濃地域で行った僧侶および葬祭業者スタッフへの聞き取り調査の結果をもとに、僧侶が自らの役割をどのように認識しているのか、葬祭業者からは僧侶役割がどのようにとらえられているのかが明らかにされた。当地域では近年、家族葬が増加しているほか、僧侶の介在しない葬送儀礼（直葬、無宗教葬など）も一定数執り行われている。その一方で、僧侶の介在しない葬送儀礼を選択した遺族に対して、葬祭業者が僧侶の介在を提案するケースもあった。法話については、葬祭業者と僧侶でそれぞれ位置づけ方は異なるものの、ともに法話を葬送儀礼における重要な実践として捉えられていた。これらの語りから、葬送儀礼に僧侶が介在する意味として、「僧侶は葬送儀礼に一定の形を与え、遺族に『故人をきちんと弔った』という安心感を抱かせていること」、「僧侶は法話で故人の人柄や思い出に言及することで、遺族に故人の新たな一面を示し、遺族が故人と出遇い直す機会を提供していること」、「僧侶は葬送儀礼を生者中心のお別れ会に留まらせるのではなく、故人の死を契機に『いのち』について考える仏事にしていること」の3点が明らかとなった。

第4章では、これまでに見てきた2つの地域での事例をもとに、現代日本の葬送儀礼に僧侶が介在することの意味を考察した。両事例が対象としたのは、門徒と手次寺がこれまでに緊密な関係を築いてきた一方で、過疎化や高齢化などの変化にさらされつつ、その関係が不安定になりつつある過渡的な地域であった。そうした中で、僧侶立ち合いのもとに行われる葬送儀礼においては、僧侶が葬送儀礼に「型」を与え、遺族や会葬者の情緒的な安心感が

もたらされていること、突然の死によって混乱状態にある故人に関する記憶の「調整役」を僧侶が果たしていること、そして遺された生者が死者と向き合う際の意味や行動様式を僧侶が示すことによって、故人なき「新たな生者の世界」の再構築を促す働きをしていることが述べられている。とはいえ、金銭的な負担や人付き合いのわずらわしさとといったことから僧侶を介さない葬送儀礼が執り行われることが許容される風潮も見られる。僧侶の側でもこうした動向に危機感が募っており、何らかの対応の必要性についても聞き取り調査から明らかになっている。

終章では、本論文での議論全体を通して見えてきた、僧侶を介した葬送儀礼の現状を示すとともに、今後の展開について言及がなされた。そこでは、寺檀関係に包含されない人々が仏式葬儀を行う場合のアクセスの問題、僧侶派遣の是非、死者自身から見た葬送儀礼の意味、コロナ禍における葬送儀礼の在り方など、これから考えるべき課題群が示された。本論文では、僧侶への聞き取り結果などから、各々の僧侶が時代状況に合わせて自らのふるまいや意識を反省的に見直しながら、「より良い」葬儀実践のあり方を模索していることが明らかとなった。また、葬送儀礼の僧侶以外のアクターである遺族や葬祭業者への聞き取りを行うことによって、各アクターで葬送儀礼における僧侶介在の意味について認識に違いがあることも明らかとなったが、遺族・葬祭業者それぞれの語りからは、僧侶が立ち会うことの積極的な意義についても示唆があった。とはいえ、本論文で参照できた事例（語り）は非常に限られたものであり、他の僧侶・遺族・葬祭業者の考え、他地域での葬儀慣行の違いや真宗大谷派以外の宗派が執り行う葬儀の特徴とそこでの僧侶の位置づけなどが十分に論証されていないことが指摘され、今後の研究課題として提起された。

## II 論文審査結果の要旨

宗教（社会学）研究において、葬送儀礼についてはその儀礼様式そのものへの着目が中心であったために、僧侶を葬送儀礼の一アクターとして主題化し、その実践と背後にある意識を問うような本論文のスタンスは意外にも宗教社会学分野の先行研究では多くはなかった。その一方で、本論文の主題である、人の死や葬送に際しての僧侶の役割については、阪神・淡路大震災や東日本大震災などでの「災害死」に際しての宗教や宗教者（僧侶など）の立ち位置への着目、グリーンワークとしての葬送儀礼という視点からの仏式葬儀や僧侶への注目が高まってきている、というアカデミックな流れもある。そうした点からすると、人の死に際しての葬送儀礼にあたっての宗教（者）の役割と存在意義を考察する本論文は、宗教社会学研究上も重要かつ貴重な研究成果として位置付けることができる。

そのことを踏まえたうえで、審査員からは以下のような課題点の指摘もあった。まず、表題にある「現代日本」の「現代」とはいつ頃から現在に至る時期を指すのか、という問題がある。例えば、「現代」の葬儀の特徴である、葬儀の「個性化」に関するくだりでは、それに対応する形で僧侶が「故人らしさ」への配慮を積極的に行うことが言及されているが、葬儀に際して「故人らしさ」に配慮した語りやふるまいが見られるのは「現代」に限ったこと

ではないかもしれない。時期区分をどう設定するかにもよるが、本論文で論じられているほどには、葬儀のトレンドやそこでの僧侶の立ち位置などがいつ頃どう変化したかについては「きれいに区切ることは難しいのではないか」という指摘が審査員からあった。

また、葬送儀礼における僧侶の存在意義を、僧侶自身の自己認識だけにとどまらず、遺族や葬祭業者の立場からも明らかにした点が本論文の意義として挙げられるが、「現代」においては死にゆく者自身にとっての、死やそこでの僧侶の立ち合い（つまり仏式で葬儀を行うこと）の意味も重要になってくるのではないか、という指摘もあった。

さらには、経験的な論証における調査対象の「狭さ」について指摘がなされた。本論文では2つの県の、どちらかというところ「地方」に属する地域が取り上げられており、磯部氏も自覚しているように、伝統的な仏式葬儀が比較的執り行われやすい風土に属する地域がチョイスされている。しかし、都市部などでは寺檀関係がもっと希薄であったり、無宗教の人の割合が高かったりもするので、本論文で示されたような仏式の形で葬儀を行うことやそこに僧侶が立ち会うことの積極的な意味づけは、他地域では強調されない可能性もある。調査の実施および論文執筆がコロナ禍で聞き取り調査の実施が非常に難しい状況下であったことによる情状酌量の余地はあるが、本論文で参照されている事例および調査対象者（僧侶、遺族、葬祭業者など）の数の「少なさ」は、選定された調査対象とそこから得られた知見に少なからずバイアスをかける要素となる。さらなる聞き取り調査の実施や多数の対象者に向けた質問紙調査の実施も念頭に置きつつ、調査対象者・地域・宗派を広げながら本論文に伏在するサンプルバイアスを補正し、より一般的な知見を得ようとする継続的努力が求められる。

本論文には、以上のように残されたいくつかの課題はあるが、現代日本において僧侶立ち合いのもとに仏式葬儀を執り行うことの積極的意義について、先行研究の整理と現場の当事者による語りを整理しつつ提示されている。そこでは従来の研究では十分に取上げられてこなかった題材が取り上げられ、独自の視点や新しい解釈が加えられており、学位論文として十分な水準を有するものと評価できる。

審査に必要とされる最終試験については、審査委員全員により2021年12月22日に試問を行った。その結果、審査委員一同一致して、磯部美紀氏に大谷大学博士（文学）の学位を授与する事が適当と判断した。